

タイ北部アカ族文化の 1991 - 1997 間の変貌

—センチャルン・マイ村の場合—

諏 訪 哲 郎

1, はじめに

タイの山地民族 これまで順調な経済発展を続けてきたアセアン諸国の一員タイは、1997年夏に深刻な通貨危機に見舞われ、先行きに不透明感が生じてきている。しかし、この十数年間のめざましい経済発展によって、タイの国民総生産は1985年の421億米ドルが1995年には1596億米ドルに増加しており、社会構造も大きく変容している。そのようなタイの経済発展と社会構造の変容は、北部山地で伝統的な焼畑農耕に従事してきた山地民族の生活にも大きな変容をもたらしている。

タイの北部山地にはチベット・ビルマ系のラフ族、リス族、アカ族、ミャオ・ヤオ系のモン族、ヤオ族、それにカレン族などの諸民族が住んでいる。かれらは元々移動焼畑民族で、カレン族を除くと主に19世紀末以降に中国やミャンマーから南下してきた民族である。しかし、1980年台初頭から焼畑に対する規制が強まり、その後バンコクで起こった大規模な洪水を契機として、1989年1月には森林伐採を全面的に禁止する法律が制定された。その結果、数年ごとに村ごと移動してその周辺の山々を開墾する伝統的な焼畑農耕はできなくなり、村の位置は固定し、農地も同じ場所を毎年使い続けるようになっていく。焼畑農耕では開墾地を4年から6年使用し続けると収穫量が急速に低下する。したがって、新たな焼畑を開墾で

きないということは、食糧確保という点で必ず行き詰まってしまうことを意味している。

筆者は、黒木三郎教授（現早稲田大学名誉教授）を代表とする文部省科研費国際学術研究「アジア諸国における諸民族の家族慣習と法政策」のプロジェクトの一員としてタイ北部の山地民族の家族慣行調査を担当し、1990年8月と1991年3月に現地調査を行った。その際に個々の世帯の実態調査を行ったのがセンチャルン・マイというアカ族の集落であった。1990年、91年は、新たな焼畑の開墾が規制されはじめてほぼ10年が経過し、「かつては1タン（20リットル）の粃を焼畑に播けば100タンの収穫があったが、今では60ないし70タンしか収穫できない。今後、収穫はますます減少するだろう。」という状況の中で、将来の村の結束と村人の生活をいかに維持していくかが重要な課題となっていた時期であった。

6年ぶりの北タイ 1997年3月13日から一週間、筆者は6年ぶりにタイ北部を訪問し、山地民族の生活の変容の一端を垣間見てきた。前回調査をしたセンチャルン・マイ村にも訪問し、この間の各世帯の動態を中心に聴き取り調査を行った。本稿では、センチャルン・マイ村の変貌の様子を6年前と比較して紹介するとともに、村を取り巻く環境の変化に対して村人がどのように対応してきたかを、主として世帯の動態に基づいて報告する。

今回の調査でも前回の調査と同様に多数の方々のお世話になった。その中でも特にセンチャルン・マイ村出身のアリヤ・ラッタナウィチャイクン氏（以後はアリヤと略称）には、前回に引き続き通訳その他で全面的にお世話になった。アリヤは6年前には、タイ北部の山地民族女性の社会参加プロジェクトを進めていた豊田武雄氏の仕事を手伝っていたが、その後、鹿児島県の民間組織が主催する「カラモジア大学」の交流研修生として一年間鹿児島県の農家に滞在して農村開発リーダー・プログラムを受け、現在はチェンライに拠点をもつNPO「高地民教育と開発財団」の中心になって活動している。

また、立命館大学の大学院生で、「高地民教育と開発財団」の活動にも参

加している崔博憲氏には、今回のタイ北部での調査活動全般をアレンジしていただくとともに、タイ語の通訳という面でも全面的にお世話になった。

2、センチャルン・マイ村の変貌

電気の開通 センチャルン・マイ村はチェンライからチェンマイへ向かうバスに乗って約1時間のメスアイという町から直線で北へ約8キロの、標高約900メートルの山中の緩斜面にある。6年前には国道を離れると、すぐに土埃の舞い上がる凹凸の激しい山道であったが、その後、谷沿いに新しい舗装道路が開通したため、今回は埃の多い凸凹道は9キロから3キロに短縮されていた。しかし、山で収穫した換金作物を町に下ろし、町の商品を山に運ぶピックアップ・トラックが増加したため、先行車や対向車による土埃を被る確率は高くなっている。

ピックアップは物資を運ぶだけでなく、私設バスの役割も果たすようになっている。6年前にはたまたま通りかかったピックアップに頼んで、ただで相乗りさせてもらえたが、今では運輸業として成立しているため相場が決まっている。交渉の余地はあるが、麓のメスオイからセンチャルン・マイ村まで一人10 パーツ（当時約50 円）である。

6年ぶりにセンチャルン・マイ村に入ってまず目に入ったのが電線と高いテレビのアンテナであった。この地域一帯に電気が開通してわずか4か月足らずであったが、全世帯の約4割にあたる17戸にテレビのアンテナが立っていた。また、石油ランプから蛍光灯にか変わったことによって、日没後、長々と明かりが漏れている家もちらほらと見られた。早寝早起きを基本としていたアカ族の生活時間にも変化が生じはじめている。

早朝の米つきの消滅 日没後以上に変化を感じさせられたのは日の出前である。アカ族の村の夜明けは、「コーン、コーン、コーン」という踏み臼の軽やかな音とともに始まるものと決まっていた。しかし、今回、早朝に聞こえてきたのは、雄鶏のけたたましい「コケッココー」「コケッコ

コーー」という叫び声ばかりで、踏み臼の軽やかな音は完全に消滅していた。踏み臼にかわって、前回の訪問後に隣村に導入された精米器でまとめて精米するようになったという。しかし、早朝に女性が踏み臼で米をつく伝統は、精米器が導入されなかったとしても消滅の方向に向かっていたはずである。換金作物を売ったり町で働いたりして得た現金で、精米済みの米を町から購入してくる世帯が、この6年の間に急増していたからである。多くの世帯が焼畑で収穫した米よりも町で購入する米に依存するようになったことは、すでに使われなくなって扉がなかったり、屋根が壊れたままになっている高床式の穀物倉がほぼ半数に達している事実が如実に物語っている。

まだ消滅はしていないが、やがて消滅すると思われるものに伝統的な機織りがある。アカ族は必要な時に庭に四本の竹を立てて機を組み立てるので、今回機織りの現場をわずか1ヶ所でしか見かけなかったからといって、機織りの習慣の衰退を断言するわけにはいかない。しかし、アカ族の伝統的な機織りになくてはならない篋(おさ:竹で精巧に作られた縦糸を通す梳状の部品)が、チェンライのナイトバザールで数百十パーツでいくつも販売されていたのは、機織りの習慣の衰退の証拠と言ってよいであろう。

前回の調査報告⁽¹⁾で、筆者は「早朝の米つきから、水汲み、炊事、洗濯、糸紡ぎ、機織り、そして畑仕事の大部分を女性が担当しており、女性の労働力としての価値はきわめて高い。したがって結婚による貴重な労働力の移動の対価として、相当額が反対方向に流れても不思議はないが、そうはなっていない。」と記したが、わずか6年のうちに、米つきの消滅や機織りの衰退ばかりでなく、糸を紡ぎながら竹や籐の籠を背負って歩く姿も、簡易水道よりも旨味しい谷間の水を瓢箪にいっぱい背負ってくる姿もめっきり少なくなった。アカ族女性の伝統的な仕事は、黒の短いプリーツスカートに脚絆という伝統的な民族衣装の減少と歩調をあわせるかのよう

機能本位の住居の増加 住まいはまだ伝統的なカヤ葺きの高床式入母屋作

りが多数派で、アカ族の村の面目を保っている。しかし、6年前にはわずか2棟であった近代的なスレートないしトタン屋根の地床形式の家屋が、46棟中11棟に増えている。このペースで増加すれば、10年後にはカヤ葺きの高床式入母屋作りにかわって近代的な家屋が多数派になっていると思われる。

伝統的な住まいと近代的な住まいの違いは、屋根の材質や高床か地床かといった外見の違いばかりでなく、間取りにも大きな違いがある。アカ族の伝統的な住まいは、図1のように男の空間と女の空間がはっきりと分かれているが、アリヤの実家は図2のように機能本位で、男性の空間と女性の空間へのこだわりは希薄になっている。

前回の調査報告の中で、筆者は、伝統的な住まいの間取りを引合いに出して、アカ族の男性と女性の相互関係について次のような私見を示した。すなわち、父系血統の連続性が重視され、かなり厳密な夫方居住でありながら、伝統的な住まいがほぼ対等な男性の空間と女性の空間に分かれているのは、アカ族社会の根底に男女の役割分担に基づく男女の対等な関係が存在しているからで、父子連名制⁽²⁾や父系出自制度は比較的新しい時代にアカ族社会に浸透した文化層ではないか、というものである。この私見の当否はともかく、機能本位の近代的な家屋への移行は、対等な空間に表現されていた、男性と女性の役割分担に基づく相互補完関係の変質を象徴しているように思われる。

村の門の消滅 センチャルン・マイ村の変貌を象徴しているという点では、村の出入り口二ヶ所に毎年新しく建てられていた鳥居状の門ロココールが、ここ数年建てられなくなった点も注目すべきである。ロココールは、村の出入り口の単なる装飾ではなく、村の内側と外側、すなわち人間の領域と鬼や畜生の領域を分かち重要な標識で、例えば、人はロココールの内側で子供を生まなければならない、豚はロココールの外側の森の中で4頭以上出産すべきである、とか、同姓不婚の掟に反して同姓の相思相愛の二人がどうしても結婚するという場合は、ロココールの外側で所帯を持た

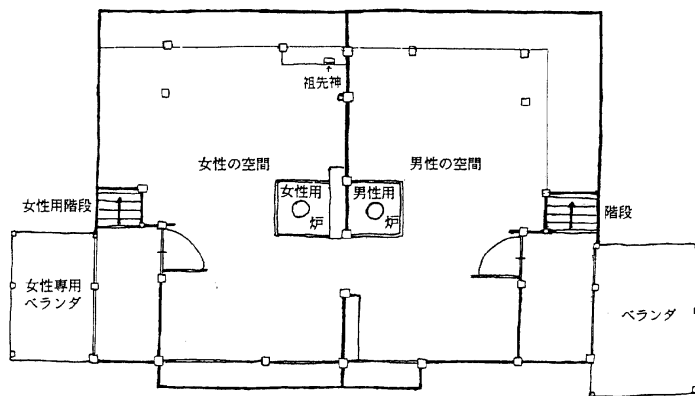


図1 アカ族の伝統的な住居

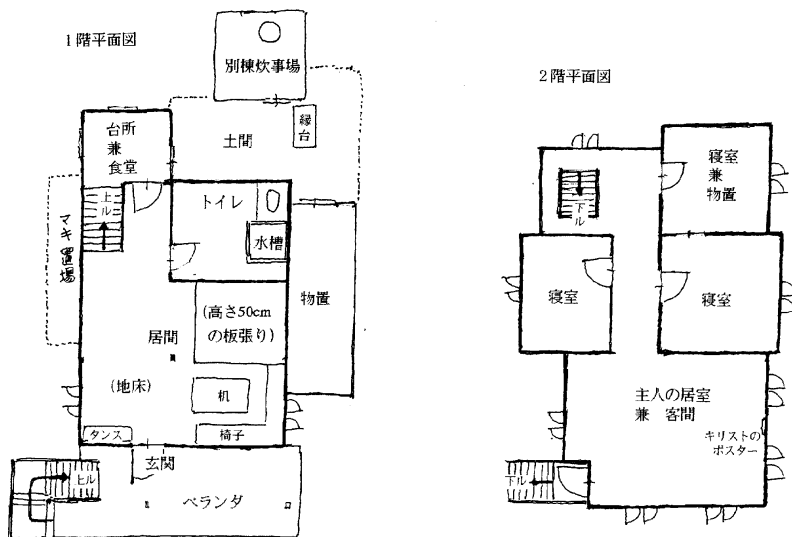


図2 アカ族の近代的な住居の例

せる、といった村の内と外に関わる多数の定めがある。したがって、ロッコールが新しく建てられず、ロッコールに付属する男女の木彫り像が放置されて朽ち果てるにまかされているのは、かつて村人を規制するとともにまとめ上げていた村の掟や定めが機能しなくなっていることを物語っている。ロッコールが新しく建てられなくなったのは、この間にキリスト教が急速に普及し、伝統的な信仰が衰退したためである。

3、キリスト教の普及

伝統的な信仰の衰退 アカ族の伝統的な信仰は精霊信仰で、祭祀には二つの系統がある。一つはジュマと呼ばれる祭祀者が執り行う村落単位の農耕祭祀で、収穫後のブランコ行事やロッコールを新しく建てる行事などはこの系統に属している。もう一つはマオピーやニマと呼ばれる呪術者が執り行う家族単位ないし個人的な祭祀で、マオピーが担当する葬式や祖先に関わる祭祀、ニマが担当する病封じなどがこの系統に属している。

6年前のセンチャルン・マイ村は二系統の伝統的な信仰が息づいている村であった。当時村のジュマは弱冠 20 歳であったが、村人の協力のもとで様々な村落祭祀が行われていた。しかし、ロッコールが新しく建てられなくなったのは、その後ジュマが執り行う村落単位の農耕祭祀が衰退し、消滅に向かったことを物語っている。この背景には冒頭で述べたような伝統的な焼畑農耕の行き詰まりによって各世帯の足並みがそろわなくなったこともあるが、直接的にはキリスト教の普及によって伝統的な精霊信仰を否定する者が増えた結果である。

マオピーやニマによる祭祀活動の衰退も明白である。6年前に三人いた呪術者のうち二人は 60 歳台後半で病没し、そのうちの一人の長男で、跡を継ぐことを期待されてマオピーという通称をもっていた者は、家族ごとさらに山深い村に転居していった。ただし、二人目のマオピーの病没後、3 年前にミャンマーからマオピーの家族が転入してきており、伝統的な精

霊信仰を存続させようという力も働いている。とは言っても 6 年前には腹痛の女性に対して鶏を使って術を施している場面に遭遇できたが、今では病気になれば市販の薬を飲み、病状が重ければ町の病院に行くというのが常識化しており、伝統的な精霊信仰の衰退は明白である。

元の村長であり、前回の調査で全面的にお世話になったアリヤの祖父アパーは、今も伝統的な精霊信仰を重視しており、ミャンマーからマオピーの家族を招いた仕掛け人と推測されている。したがって長男のアムーがキリスト教に入信し、孫のアリヤが教会で結婚式を挙げたことに対し苦々しい思いを隠さなかったそうである。しかし、そのアパーも、妻のアチューが腰を痛めた時は町の病院に入院させ、看病に付き添っている。センチャルン・マイ村に住むアパーの 4 人の息子のうち、キリスト教に入信したのは長男と四男で、次男と三男は伝統的な祖先祭祀を行っている。

キリスト教の浸透 センチャルン・マイ村の場合、メスオイの町に住むイタリア人宣教師がキリスト教の布教活動を行っている。またメスオイの教会との連絡係である村の 24 歳の独身男性が牧師代行としてキリスト教の浸透に一役買っている。しかし、村のキリスト教徒のほぼ半分がカトリック、半分がプロテスタントということなので、キリスト教の浸透が単一ルートでないことは確かである。村を出て町で仕事をしたり学校に通った者がキリスト教と接して家族に入信を勧めた可能性もあるだろうし、すでにキリスト教化した他のアカ族の村落を訪ねてキリスト教と接したものもいるであろう。

アパーの長男アムーのキリスト教入信は、村のリーダー格で実質上の村のまとめ役を果たしていただけに影響が大きかったと思われる。アムーの場合、かねてより伝統的な精霊信仰に疑問を抱き、5 年ほど前からキリスト教の世界に関心を寄せてメスオイのイタリア人宣教師を訪ねて話を聞いたり、相談に乗ってもらったりしていた。そして、1 年前にメスオイの小学校に通っていた甥がメスオイの川で溺れ死んだ時に、時代の変化に対する伝統的な精霊信仰の無力さを強く感じ、キリスト教への入信を決意した

という。精霊信仰一色の中で育ち、その重要性を十分に認識しているアムーにとって、キリスト教への入信は苦しみ悩んだ末の苦汁に満ちた選択であった。そのことは、夜の薄明かりの下で、一つ一つ言葉を選びながら入信に至る経緯を語ったアムーの表情が如実に表していた。アムーの部屋にはマリアやキリストの描かれたポスターが3枚貼られ、その内の1枚はタイの仏様やピー（精霊）と同じように造花で飾られていた。

1996年3月1日にセンチャルン・マイ村の教会で結婚式を挙げたアリヤの場合、妻のアミが、有名なアカ族研究者でありキリスト教の宣教師でもあったポール・ルイスの事務所で仕事をしていたので、アミと知り合ったのがキリスト教に接近する重要なきっかけだったようである。

センチャルン・マイ村の場合、町に近く、キリスト教に接する機会が多かったこともさることながら、伝統的な焼畑農耕が行き詰まる中で伝統的な精霊信仰が衰退し、キリスト教が浸透する素地が出来ていたために急速に普及したものと思われる。

キリスト教浸透の影響 キリスト教の浸透によって村に教会が建てられたが、ヨーロッパの教会のような尖塔があるわけではなく、どちらかというどひっそりとした建物で、センチャルン・マイの景観にはほとんど影響を及ぼしていない。ただ、村人の意識は大きく変わったと見てよいであろう。その変化を象徴するエピソードを二つ紹介しておく。

父親の名前の後ろの音節を子供の名前の第一音節につけるアカ族の父子連名の名前は多様であるが、村の中で通常用いられる通称は同じ2音節とはいえ大部分は第一音節がアで始まる単純なものであった。しかし、最近生まれた子供の場合、スパポンとかウィワウィ、ソムチャイという国籍取得に必要とされるタイ式の名前が通称につかわれることも多くなっている。そして、まだ3例ではあるが、マリアやヨセー（ヨセフ）といったキリスト教にちなんだ名前が通称に登場してきている。

忌み嫌われる存在であった双子の誕生に対する対応の変化も注目に価する。前回の調査報告で、聞き取り調査に基づいて筆者は次のように記述し

ている。

アカ族やハニ族は、双子や6本の指を持って生まれた子供は、人間の世界にあってはいけないことで、そのまま生かしておくとかとあとと災いが起きると信じられているので殺される。センチャルン・マイ村ではそのような事例は起こっていないが、双子が生まれたら当然殺すことになるという。たとえ生まれたばかりであっても殺人になるので、双子を殺す慣行に対してタイ国政府の干渉があるのではないかと、との間に對し、「アカ族の集落で双子が殺されたとしても、政府の役人がそのことを知ることはまずないし、もし知ったとしても、双子を殺さなかったために生じるかもしれない災いに対して責任が取れないので、役人は見て見ぬ振りをするはずである。」との返答が返ってきた。

しかし、それまでなかった双子の事例がセンチャルン・マイ村で生じたのである。教会の並びの家に住んでいる女性Aさんは、17歳の時に村を出た後、チェンマイでチンホー族の青年と結婚して暮らしていたが、2年前に村に戻ってきて程なく双子を出産。双子は元気に村で育ており、命を脅かされるようなことは起こっていない。

4，教育の普及

教育意識の向上 村人の意識の変化という点では、教育に対する意識も確実に変化している。村から北西約1.5キロにあるセンチャルン・ガウ村に小学校があるため、6年前の時点でも就学率は高く、9歳から14歳までの子供のうち男児は15人中11人、女児は20人中18人が就学していた。中学はセンチャルン・ガウ村にもないので中学進学時に村を離れるというのが基本的なパターンで、実家を離れて遠隔地で就学していたものも男性16人、女性13人に達していた。そのうち13歳未満の遠隔地就学者は男子が4人、女子が1人だけであった。しかし、今回の調査では、学年の切

れ目で不確かな部分もあるが、遠隔地就学者は男子が26人、女子が31人に増加しており、そのうち13歳未満は男子が5人、女子が14人に増えている。

数字を見ると全体として教育に対する意識が一層向上し、特に女兒に対して一段と高い学歴を付けさせようとする傾向がうかがわれる。それは一面では真実で、6年前には小学校の入学年齢にばらつきがあり、10歳を過ぎてから小学校入学というケースも多かったが、今では7歳になると大抵の子供はセンチャルン・ガウの小学校に通い始めている。また、小学生の段階ですでに村を離れて遠隔地で就学するものが多くなったのは、「山の学校にきているタイ人の教師はあまり熱心でなくタイ語の力が十分につかないので、上級学校へ進学させるには麓の学校に通わせなければ」という親たちが増えたからだという。しかし一方で、あからさまな説明はなかったが、家計が苦しいために学費も食費もかからないバンコク近郊の寺院の寮や、メスオイの教会の寮に子供を送っているケースもある。村内で広がってきた所得格差が、上級学校進学と養育費軽減の両面の思惑から結果的に遠隔地就学者の比率を高めていると言える。

センチャルン・ガウ小学校 村の子供達が通う学校はセンチャルン・ガウ村の見晴らしのよい尾根筋にある。小学生129名、幼稚園児47名、先生6名からなる学校である。6年前にはなかった幼稚園の園舎が日本のある団体の寄付を得て新築され、小学校の校舎も先生用の宿舎も増築されていた。前回正確な生徒数を聞かなかったが、生徒数は明らかに倍増している。ほぼ半数の生徒が授業を受け、残りの生徒は屋外や教室内で遊んでいるという姿は前回同様であった。

たまたま一つのクラスでは算数の学期末試験が行われていた。二桁の足し算と引き算の試験であった。試験終了後、担当の先生が我々の所にやってきて、「この生徒はよくできる。ほとんど満点だ。」と自慢したが、先生の留守中に教室を覗いて、教科書を見て同じ練習問題を必至に搜して解答していたり、隣の生徒の答をおおびらに写している姿を見ていたの

で、返答に窮してしまった。予算が足りないから十分な教材を使用できず、満足な教育を施せない、と先生は嘆いていたが、センチャルン・マイのある村人が不満げに言った「教師が熱心でない」という意見もある程度は真実のようである。崔博憲氏は、山の学校に勤めているタイ人教師は「月曜日の午後に麓から登校し金曜日の昼過ぎには麓に帰るのが一般的な姿」と言っていたが、たまたま月曜日の午前中に訪問したためか、6 人いるはずの先生のうち 3 人しか姿が見えなかった。

炊事室では 30 歳台の女性の先生の指導の下で、当番の生徒 5 人が熱心に昼食作りをしていた。材料費はタイ政府の負担ということである。学校に行けば無償で必ず昼食を食べれるということも高い就学率の一因となっているのかもしれない。しかし、別の見方をすれば、タイ語教育を柱とする学校への就学者の増加は、アカ族自身がタイ社会への同化の道を選ぶようとしているとも言えそうである。

女子の高進学率、高学歴化がかなり影響しているのではないかと思われるのが、結婚年令の上昇である。前回の調査では男女とも 15 歳から 21 歳に初婚のピークがあったが、この 6 年間に結婚し、村に住んでいる初婚者の結婚年令は全員 18 歳から 24 歳で、結婚年令の急速な上昇が見られる。センチャルン・マイ村出身で村外で結婚した者の初婚年令は 17 歳から 27 歳と幅があるが、より高齢での結婚という傾向が見られる。

都会の学校に進学した者が、そのまま都会で就職するケースも多い。バンコクで中学、高校を卒業し、そのままバンコクにある銀行に勤務した女性が、たまたま里帰りしていたが、屋外での労働と無縁なために色白に変わっており、山での生活をどう思うかとの質問に対して、「焼畑でのきつい仕事など絶対にいや。」というきっぱりとした返答が戻ってきた。

5、家族の動向

人口の動態 1991 年 3 月のセンチャルン・マイ村は 42 戸からなり、人口

は男性126人、女性143人、計269人。このうち男性16人、女性13人が遠隔地で就学していたので、常住人口は240人であった。その後の6年間に6戸が近代的な家屋に建て直されたほか、6戸の住居と教会と店舗が新たに建てられた。2戸が空き家となっているので、それを除くと1997年3月の戸数は46戸である。この間の出生は39人（男子19人、女子20人）、死亡は14人（男子11人、女子3人）で25人の自然増である。転入は48人（男子16人、女子32人）、転出も53人（男子23人、女子30人）で社会減は5人である。その他に遠隔地就学で村を離れたものが38人（男子16人、女子22人）と、罪を犯して刑務所にいるものが2人（男性）、遠隔地就学から戻ったものが5人（男子3人、女子2人）いる。また、遠隔地での就学から村に戻らず、そのまま遠隔地で就職したものが5人（男子3人、女子2人）いる（この5人は転出にカウントしている）。

したがって、センチャルン・マイ村の1997年3月時点の人口は289人（男子127人、女子162人）。前述の遠隔地就学者57人（男子26人、女子31人）と受刑者2人を差し引いた常住人口は230人で前回より10人減少している。

「子だくさん」の復活 この6年間にセンチャルン・マイ村で誕生した39人が第何子として誕生したかを集計してみると、第一子9人、第二子7人、第三子10人、第四子8人、第五子5人となっている。前回の調査で既婚女性の一人当り出産数を年代別に集計して、60歳台が7.0人、50歳台が8.6人、40歳台が6.7人、30歳台が3.7人、20歳台が1.9人となっていることから、「30歳台、20歳台の既婚女性が今後出産する可能性はあるが、少産化傾向は明らかである。」「この10数年の間に急速に少産傾向に転じたのは、国家による人口抑制キャンペーンに呼応したものと解釈できるが、新たな焼畑地開墾の可能性が次々と狭められる中で、アカ族自身が人口増大をセーブさせる方向を選択していったとも考えられる。」と記した。しかし上記の第三子10人、第四子8人、第五子5人という数字は、この6年間については人口増大をセーブさせる方向に向かわなかった

ことを意味している。

アカ族は父系血統の連続性を重視する観念を持っているので、人口増大をセーブさせる規制が緩めば潜在化していた「子たくさん」願望が復活しても不思議ではない。短期間の調査であったため、どのような要因が「子たくさん」に逆戻りさせたかを特定できないが、少なくとも次の三つがあるであろう。

- (a) キリスト教が浸透し、その半数を占めるカトリックの家庭で産児制限に消極的になった。
- (b) 交通の便がよくなって、現金収入を得る機会が増えるとともに、現金さえあれば米を必要なだけ購入できるようになったため、産児制限の必然性が薄れてきた。
- (c) 共同体としての結束が緩み、相互規制が十分に働かなくなって個人主義的な行動が増え、産児制限に協力しない世帯が多くなった。

聞き取り調査を進めれば、どの要因が大きく作用しているかをつきとめることは出来るであろうが、おそらくすべての要因が相乗的に作用しているのであろう。

ヘロインによるショック死 この6年間の村人の死亡は14件であるが、死因を見ると、上の村の(c)で述べた「共同体としての結束の緩み」を感じさせられる。

前回の調査時の在村者で今回の調査までに死亡した14名のうち50歳以上はわずか5人である。他の9人はいずれも30歳以下で、その内5人は白血病、糖尿病、溺死、悪性の風邪(?)などで致し方がないが、残る4人の内の3人はヘロインによるショック死、あと1人は自殺である。

6年前にも村には麻薬常習者が十数人おり、そのうちの2人は明らかな麻薬中毒者で、見るからに不健康な顔色をしていた。当時の麻薬は阿片で、パイプによる吸引の常習によってじわじわと身体が蝕まれ、無気力になっていったが、若年死に直結するものではなかった。しかし、現金収入の道が広がるのと歩調を合わせるかのように、精製されたヘロインが村に

広がり、より強い刺激を求めた若者がヘロインの溶液の皮下注射を行うようになり、事故を引き起こしたという。対政府の責任者である助役によると、センチャルン・マイ村にはなお 13 人の麻薬中毒者がおり、彼らは村の共同作業にも来ないという。ちなみに受刑中の一人はヘロインの売買によるものである。

前回の調査時には、30 ないし 40 歳台からなる村の委員が結束して 20 歳のジュマを盛りたて、村の将来像を描こうとしていた。しかし、一部の中堅層はキリスト教を受け入れることによって年配者から離れていった。また、相当数は伝統的な生業を離れて現金収入を求めていった。そして若年層の一部はヘロインに走っていった。ヘロインが村に広がったのも、ある意味では村の結束の緩みの結果とも言える。

自殺をした女性は、村を出てリス族青年と結婚した後、自分がエイズに感染したと思って自殺したということである。エイズがらみの死亡は村の出身者で一例あるほか、村の娘と結婚したあと離婚したリス族青年の例がある。山地民族の男性のエイズは、性行為によるものよりヘロイン用の注射針による感染が多いとのことである。崔博憲氏によると、チェンライ一帯の近年の死亡者の約 4 割はエイズによるもので、この傾向はあと 5 年は続く予想されているが、コンドームの普及によって新たなエイズ感染者は急減しており、タイにかわってミャンマー、ラオス、カンボジアのエイズが深刻な事態になっているという。

頻繁な転入・転出 センチャルン・マイ村の転入・転出は、農耕民社会としては異例の多さであろう。遠隔地就学に関わる出入りを除外しても、この 6 年間の転出は 91 年の人口の 2 割、転入は 91 年の常住人口の 2 割に達している。転入・転出とも色々なケースがあるが、転入については子連れでの嫁入りと遠来の男性の転入および夫方から妻の実家への転居が目を引く。

村内に住む男性で、この 6 年間に結婚（再婚を含む）したのは 8 人で、そのうちセンチャルン・マイ村出身の女性と結婚したのは 1 例だけであ

る。他の村から嫁いできた 7 人のうち 4 人が 2 人ないし 3 人の子連れである。連れ子のある女性と結婚した 4 人の男性のうち再婚者は 1 人で、あとの 3 人は初婚である。前回のフィールドノートには、「初婚か再婚かはあまり気にしない。再婚者に子供がいるかいらないか関係ない。・・・儀式を行うことによって血のつながりのない連れ子を血のつながりがあるかのようにすることができる。子供の姓も変える。父子連名の方の名前も変える。」とあったが、夫に先立たれたり離婚して村に戻ってきた 3 人の女性のだれも再婚していなかったで、報告の中では、「(上記の)建前とは裏腹に、再婚の女性や連れ子を歓迎しない風潮が生まれている疑いが濃い。」と記している。この場で前回の報告の記載を訂正させていただくとともに、フィールドノートの記載、すなわちインフォーマントの発言が正しかったことを強調しておきたい。

繰り返し述べているようにアカ族は父系血統の連続性を重視する観念を持ち、夫方居住を原則としているが、センチャルン・マイ村では、前回の調査時点で 3 人の女性が外から来た男性と結婚し、村で暮らしていた。しかし、リス族の男性と同居していた女性は、その後、夫とともに夫側のリス族の村に移っていったし、タイ族の男性と結婚していた女性は、その後すぐに離婚し、娘とともにチェンマイに転出している。そして遠来のアカ族と結婚していた女性は、夫に病気で先立たれている。したがって前回の 3 例はいずれも早々に妻方居住が解消されたが、その後、新たに村の女性が遠来のアカ族男性と結婚し、村で暮らすケースが 3 例発生し、いずれも妻方居住が継続している。また、隣のセンチャルン・ガウ村に嫁いだ女性が夫とその母親、末娘とともにセンチャルン・マイ村に戻って暮らす例が生まれている。家を建て替えるので妻方の実家で一時暮らすというのではなく、センチャルン・ガウ村にいた夫の兄弟が皆死去したし、妻が実父のそばで暮らしたいと望んだからそうしたという。いずれにせよ父系社会に見られる夫方居住の原則は相当崩れてきていると見てよいであろう。

転出では、家庭の崩壊による妻と子供の離村が少なくない。この 6 年の

間に村内では離婚が3件あり、妻が村内出身の事例では、妻が実家に戻ただけで転出していないが、妻が村外出身の2事例では、いずれも妻が子供を連れて転出している。夫をヘロインのショック死で失った2事例でも、村外出身の妻が子供を連れて転出している。

村外の男性または女性と結婚して一時的に村で生活していたものが、夫婦そろって転出した例も2、3あるが、長年センチャルン・マイ村で暮らした夫婦子供が村を出た例も2例ある。1例はすでに紹介した夫がマオピーという通称を持つ家族、もう1例は、この6年の間に両親を病気で亡くし、弟をヘロインのショック死で亡くし、妹を糖尿病で亡くした家族で、夫婦子供全員で妻の実家のある村に転出している。おそらく彼らにとってセンチャルン・マイ村は不吉な場所と感じたのであろう。

様々な理由で多くの人が村を去ったが、そのあとを埋めるかのように多くの人が村に入ってきて、全体としては同じような村の規模が維持されている。国道まで9キロ、メスオイの町まで10キロという平地に働きに出るのに比較的便利な場所に村があるので、センチャルン・マイ村は過疎化の道を歩む心配はなさそうである。現在村にはピックアップが1台あり、オートバイは9世帯が所有している。そして、朝、オートバイでメスオイやチェンライに働きに出て、夜、村に戻ってくるのを生活の基本にしている者や、生活の拠点を町に移し、時々オートバイやピックアップで村に戻っている者がすでに現れている。山の畑での農耕が行き詰まっている以上、今後、そのような生活をする村人が増えるのは必然であろう。

6、おわりに

村の変貌の要約 本稿で述べたセンチャルン・マイ村の6年間の変化の主要なものを要約して列記すると以下のようになる。

- 1, 舗装道路が開通し、村の換金作物や町の商品を運ぶトラックが増加した。

- 2, 電気が通って全世帯の約 4 割にテレビが普及し、就寝時間が遅くなりつつある。
- 3, 早朝の米つき、水汲み、糸紡ぎ、機織りという女性の伝統的な仕事が減少した。
- 4, 男女の空間に分かれている伝統的な高床式住居が減少し、近代的な家屋が増加した。
- 5, 村の内側と外側を分かつ重要な標識である鳥居状の門が建てられなくなった。
- 6, 伝統的な精霊信仰にかわってキリスト教が普及し、キリスト教式の命名も登場した。
- 7, 小学校への 7 歳からの通学が定着し、遠隔地就学者も増加した。
- 8, 社会構造の変化や高学歴化に伴い、結婚年齢が平均で 3 歳上昇した。
- 9, 米の購入が容易になったうえ、カトリックが浸透して、「子だくさん」が復活してきた。
- 10, 阿片にかわってヘロインの皮下注射が広がり、若者のショック死が続いた。
- 11, 家庭の崩壊による妻子の離村や子連れ結婚、村外労働が増加した。

上記の諸現象の多くは、センチャルン・マイ村だけの特殊な状況ではなく、東南アジアの山地民族の村々に共通するものである。大局的には平地の多数派民族の文化に同化・吸収される道を歩んでいるかもしれないが、個々の変化の過程の中にしばしば民族の伝統文化への強い執着・執念を見ることができる。

伝統文化への執着 新たな焼畑の開墾が禁止され、焼畑農耕が行き詰まっているのは事実であるが、センチャルン・マイ村の村人たちは政府の定めた規制に完全に服従してしまっているわけではない。村から谷を一つ隔てた山の畑を訪ねると、火入れをしたばかりの焼畑地が広がっており、そこには優に 20 メートルはある真っ直ぐな白い灰の筋などがくっきりと残っていた。単に既存の畑に火入れをただけでなく、周囲の森の木を伐採

し、畑を広げていたのは明らかである。話を聴くと約一か月前に村の数世帯が共同作業で開墾したという。

ほかにも政府の規制に対する村人の抵抗と思われる事件が起こっていた。畑の火入れの際に、松やユーカリが植えられた隣接する植林地に延焼したという事件である。センチャルン・ガウの小学校から戻ると、昼前だというのに、アリヤの実家では7、8人で酒盛りが行われていた。昼前の酒盛りは、植林地への延焼を故意の行為として当事者を追及しようとしていた植林地の管理責任者を缶詰と米で作った焼酎で接待し、懐柔するためのものであった。2、3時間に及ぶ酒宴の結果、今回の植林地への延焼事件は不問に付されることになったが、この間のやり取りで発揮した男たちの政治力、交渉能力こそ、休む間もなく働いているアカ族の女性が、あまり働かない男性を高く評価し、尊敬してきた所以である。

地球環境という観点からは、森林の保護・育成は大切で、焼畑地の拡大を図った村人の行動は決して誉められたものではない。しかし、民族の伝統的な生業に対する執着はいつまでも続いて欲しいものである。これから先も、これまでの6年間に匹敵するような変貌をセンチャルン・マイ村は経験すると思われる。その変化はおそらく平地の多数派民族への同化の道であろう。しかし、完全に同化されてしまうのではなく、これまで継承してきた民族文化を維持して次の世代に伝えてほしいと思う。民族文化へのノスタルジーもないわけではないが、多様な民族文化が共存している姿こそ、国家や地域の健全な姿と考えるからである。

【文献および注】

- (1) 諏訪哲郎：タイ北部アカ族の家族慣行 ―センチャルン・マイ村の調査報告―、『アジア社会の民族慣習と近代化政策』（黒木三郎教授古希記念論文集、敬文堂）所収、1992 年
- (2) アカ族は父系血統の連続性を重視する民族で、父子連名という特色ある命名法を長年保持してきた。父子連名制は父親の名前の後の1音節を子供の名前の第一音節に採用していく制度で、たとえばアリヤの祖父の名前チャガーは、彼の父親ビョチャ

タイ北部アカ族文化の 1991 - 1997 間の変貌（諏訪）

の後の 1 音節チャを第一音節につけている。ただし、父子連名に基づく名前は、もっぱらマオビーが葬式などの儀式的時に使うもので、アリヤの祖父は通常村ではアパーという通称で呼ばれており、チャガーと呼ばれることはない。前回の家族慣行調査で、全世帯の家族構成を調べたが、名前を訊ねた時に返ってくるのは通称で、父子連名に基づく名前が答えられたのは、故人となった年長者に限られていた。

（教職課程 教授）